

多治見自警団



所在地	多治見市
代表者	団長 松島祥久
活動人数	482人 (112社)
活動開始	平成17年9月
活動エリア	多治見市内



○企業をはじめとして地域のさまざまな主体が防犯活動に取り組むことは、安全で安心な地域づくりには欠かせません。多治見市内の企業の集まりで地域の見回り活動を続け、平成18年度に「岐阜県安全・安心まちづくり賞」を受賞し、平成24年には「安全・安心まちづくり関係功労者内閣総理大臣表彰」を受賞された多治見自警団で、団長を務めておられる松島祥久さんにお伺いしました。

―― 松島さん、まずは活動を始めた経緯について教えていただけますか。

松島 平成16年頃から、全国で増加していた事務所荒らしや自動車盗などの犯罪を防ぐため、自分たちで何とかしなくてはという気持ちがありました。そこで、多治見市内の志のある企業と従業員に呼びかけを行い、自分たちの町は自分たちで守るという思いで、平成17年9月に62社の企業、総勢280人で「多治見自警団」を結成しました。現在では112社が参加し、480人を超える団員が活動しています。

―― 主な活動について聞かせてください。

松島 自警団は、「自治体が警察が何かしてくれるのかを問うなかれ、自治体に、地域に対して何ができるかを問え。事業所を従業員とともに守ろう」というコンセプトで、自分たちの家

族と会社を自分たちで守るために、企業を中心とした母体をもつ自警活動を行おうということで、企業とその周辺地域の巡回パトロールと防犯意識の啓発から始めました。

―― 巡回パトロールはどのように行っておられるのですか。

松島 参加企業とその周辺地域を9班の12コースに分けて、徒歩により夜間のパトロールを行っています。3人1組で8グループの計24人が、多治見市内をほぼ毎晩、1時間程度歩くことによって、犯罪の抑止を図っております。

―― 徒歩でパトロールを行っておられるのですか。



松島 自動車巡回するという方法もありますが、自分たちは、歩いて回るということにこだわりを持って、パトロールを行っています。結成当初は、自分も団長ではなく1団員でしたが、本当に徒歩でできるものだろうか、自分の会社の従業員に、仕事が終わってから残業でもないのにもう一回夜のパトロールのために出てきてもらうようなことを説得できるのだろうかと思いましたが、でも従業員は、いいことだからやりましようと言ってきて活動が始まったのです。自分たちが地域のため



にできることは何なのかを考え、多くの従業員が積極的に参加してくれるようになりました。活動を通して、自分たちが地域に生かされているという意識を持つようになり、地域貢献への意識が高まったように思います。

―― パトロール以外にも様々な活動をされていますね。

松島 実際に夜間歩いていると、側溝がなかったり、暗くて危険な箇所がたくさんでできますので、発見した危険箇所を行政や町内会に報告するとともに、自分たちでできることは改善しました。例えば、側溝のふたを市から支給してもらって、自分たちで蓋かけをしました。街灯が切れている箇所があれば町内会に逐次報告しています。巡回地域を中心に、廃屋・空き家の調査を実施して、2棟の撤去につなげたこともあります。ほかには、地元のイベントの警備なども行っています。

―― 毎年、総会を開催されているとお聞きました。

松島 はい。こうした外向きの活動を続けるために、団員の意識を高揚するための内向きの活動も行っています。団内の活動として、年に1回総会を開催し、特に功績のあった団員を表彰しています。あわせて、団員同士の交流と慰労を兼ねた立食パーティーを



催しております。そのほか、毎月1回コミュニティFMに団員1名が出演したり、地区防犯協会が発行する地域安全ニュース「セーフティサポート」を会員企業にFAXで周知するなどの活動も行っています。

―― 団員のマグネットシートも作られていますね。

松島 はい。参加企業が負担して団名の入ったマグネットシートを作成し、事業所の出入口や車に貼って、団員の連帯意識の高揚や犯罪の抑止を図っています。また、毎月1回、自警団ニュースの発行も続けています。ニュースでは団員のパトロール日記や防犯情報を掲載するほか、企業のPRも行っております。

―― 防災の活動も行っておられるとか。

松島 団員の方から、水を備蓄しておいてはどうかという話が出まして、1人3リットルの水と、ソフトパン、缶詰などを、会社の社員数分だけ備蓄することにしています。社員もいざというときに全員来られるわけではないので、地域の人で分けて利用しましょうという考えで社員数分にしています。平成20年には、多治見市と防災協定を締結しました。備蓄の飲料水等は毎年確認しまして、更新しております。

―― 災害時の水や食料の備蓄で

すね。災害時一時避難所の提供もされていますね。

松島 はい。災害時に、一時避難所として事業所の建屋や用地を提供することにしています。29社に賛同いただき、建屋は耐震構造を備えている10カ所、用地は28カ所を提供しています。

―― 東日本大震災の被災地の視察をされたと聞きました。

松島 はい。東日本大震災の後、われわれは自分たちの町を守っていくという思いで活動しているが、自警団としては何ができるだろうかと考えました。そこで、平成23年9月から団員に呼びかけ、総勢52名で被災地の視察、研修にバスで行ってまいりました。岩手県陸前高田市の避難所になった慈恩寺というお寺の住職の方がたまたま団員と親交があったため、被災地の状況を詳しくお聞きすることができました。その際に印象に残ったこととして、被災直後には生活物資やそれを仕分けしたりするボランティアが必



要になります。それが落ち着くと、自立していくための仕事が必要だということでした。

―― なるほど。

松島 そこでわれわれとしては、以前から交流のあった陸前高田市の広田湾漁協を支援しようと一口1万円で募金を集め、私を含め4人の団員が現地を訪れて、それまでに集まった133万円を渡し、震災後にはじめて収穫されたわかめを、およそ450キロ買い取りました。





―― それが「ひろた基金」ですね。

松島 はい。広田湾漁協は、震災で建物が全壊し、およそ900隻の船が流されるなど、大きな被害を受けています。ひろた基金は、お金を渡すということではなく、海産物を購入することで生産が追いついてくるという考え方のもとでやっています。この活動は単年で終わるものではなく、10年間にわたって、広田湾漁協に水揚げされるカキやホタテなどの海産物の買い取りを続けることにしています。

―― 被災地の視察は、地域の防災対策にも生かされているそうですね。

松島 このような大きな災害が自分たちの町で起こったらと考え、団員に声かけして、防災意見交換会を開催しました。各企業の防災対策マニュアルの見直しを行ったり緊急連絡カードを作成するなど、防災対策の強化につなげることができました。

―― エコストーブを作られたとか。

松島 はい。被災地の視察で、ガスや電気が止まって煮炊きができなかったという話を聞きました。そこで、自警団の10周年記念事業として、消防団の方に協力していただいて、ガスや電気が止まっても、少しの火力で煮炊き

ができるエコストーブを150個作りました。消防署や警察署、市などに70個ほど寄贈する予定です。

―― 地域の夜間パトロールに始まり、本当に幅広い活動をされていますね。長年続いている秘訣はありますか？

松島 夜間パトロールは、400人以上の団員で順番に回していくため、月に1回程度しか歩かなくてもよいので、長続きしているのだと思います。それこそ毎週とか毎日だと本当に負担になって嫌だという話になると思いますが、月に1回程度のため続いているのだと思います。あとは、毎年のように新しい活動にも取り組んでいくことで、

自警団の意識が保っていられるのだと思います。

―― 課題はありますか。

松島 課題としては、新たな事業所を勧誘していかなければならないということと、自治会との連携が必要ということです。現在は、事業所に限らず個人でも参加したいという方もいらっしゃるのですが、個人でも入ってもらって歩いていただいているという状況です。

―― 今後に向けてひとことお願いします。

松島 このような活動は負担があるとなかなか難しいと思いますので、絶対にやれということではなく、雪や雨の日は順延するなど、ゆるい運営の話をしながらやっています。いろいろな活動に取り組んできて、これでなんとか10年来たなという感じでありませうけれども、これからも多治見のことを考えながらわれわれができることをやっていきたいと思っています。

